

一葉、南支調査會發行、定價壹圓) (柴田孝夫)

ブラジル、サンパウロ州内の考古學的調査

「ブラジルに生れた此報告を本邦學界に紹介する機會を與へられた光榮を感謝致します。ささやか乍ら對黠國にある同胞二十萬の事業の一として先輩各位の御指導願います。このはしがきを讀む者は遙か南米の地で我が祖國の事を思ひ浮べ乍ら雄々しくも開拓事業に従事するかたはら文化事業にも乗り出したブラジル、サンパウロ在留の我が邦人等に幸あれかしと祈り度くなる。

本書は一九三六年三月にサンパウロ帝國總領事官邸で生れた在留邦人の組織する「ブラジル・インディオ文化研究同好會」の第一回報告書である。今それが當時の總領事であり又會長であつた市毛孝三氏等の盡力によつて東京人類學會の人類學叢刊乙先史學第二冊として公刊された事は同會員は固よりのこと内地の我々に取つても等しく慶びとする處である。本書の記載乃至考察に就いてこれを専門的な見地からなほ多少の議すべき點であるとしても、ペルーのインカの文明の二、三しか知られてゐない我が考古學界に取つてこの南米の先史文化の具體的な姿は一のフレッシユなものとして學的興味を與へるも充分なものがある。

本書に收められた遺跡はこのサン・パウロ (Sao Paulo) 州内の海岸地帯 Igape 郡にあるシボプラ (Gyobura) 貝塚、海岸山脈内のアレクソン (Alecir) 貝塚、及び奥地 マットグ・ロソ州 (Mato Grosso State) 境にあるアリアンサ (Aliança) の三者で、その一

々の遺跡の發掘狀況と遺物とが録されてある。而して其の一期の發掘はたゞ渡米された鳥居龍藏博士の指導の下になされたのであつた。

さてシボプラ貝塚はリベイラ河 (Rio Ribeira) に沿ふたイグアッペ港から約五時間の海外興業株式會社の植民地内にある。こゝにて四つの貝塚が發掘された。何れも標高約四十米位の丘陵麓に位置し今なほ附近の低地は沼地をなしてゐる。牡蠣がこの貝塚を形成する貝類の九十八%を占むる事から、この原地形が想像される。不思議にも土器是一片も存在しない。鳥獸鳥骨の他に最下層から大形磨石斧數個を得た事實は特筆さるべく、また他に貝層中から十一體の横臥屈葬の骨が見出された。アレクリの貝塚もあまり海岸から遠くないベイシエ河 (Rio do Peixe) の支流、ブラッソ・ド・メイオ (Riacho do Meio) に沿ふた平地にある。貝は陸産のカタツムリである。こゝでも貝墓と疑はれる人骨の埋葬を見た。成人骨五體、幼兒骨をその傍らに伴つて發見した。そのあるものには頸部に頸飾用の有孔獸牙を七十五個も伴ひ、また赭土を頭骨に見た。石器中粗雑な打石器は技巧の拙なものである。最後のアリアンサはサンパウロ市の北西八百キロメートルにある臺地で、開拓前は鬱蒼たる大森林に蔽はれてゐたと云ふ。この遺跡は後述の土器を伴出する磨製石器類を見る地帯と殆んど土器を伴はない所謂小形石器を發見する地帯とに區分されて、後者は報告者は「舊石器時代の石器とも見るべき……」と言つてゐるが、それは所謂後期舊石器の剝片技術を保持した石器類と解すべきであらう。

彙 報

次に前者の土器は勿論成形に轆轤を使用しない厚手の廣口鉢形のものであるが彩文である點が興味を引く。文様は格子狀紋或は渦紋瓜形等を主として居り、又十字の如く記號的な間刻線をこの土器片に見るのは、石片或は岩石上に刻されたものとの連系の考へられる點で注意される。

以上は本報告の概要であるが、さてこの三遺跡に於いて土器を伴はないで、剝片石器・骨器・埋葬人骨を有する貝塚の性格とアリアンサのある地域で見た土器類とが問題となるであらう。しかし發掘者は其等の年代乃至文化の性格に就いては語つてはゐないが前者は吾々をして初期新石器文化乃至中期石器的な様相を思ひ浮べしむるものであり、後者はインカ文化以前の系列を聯想さすのであらう。

一體南米の大陸文化はその地名の示す如く、又其の現住民の三分の一がポルトガル・スペイン人等の歐洲人である事等から十六世紀中葉以降のスペインの侵入が過去のこの地の文化を如何に味氣なく抹殺して了まつたかと云ふてよい。併し外形的に抹殺され切れないで残つてゐる舊文化の斷片が所々に存在してゐる。チチカカ湖を中心としたインカの文明もさる事乍ら、少くも今の吾々には北端ヴェネゼラのマラカイボ湖畔に残した湖上住居の文化と南パタゴニア平原に残された所謂 Patagon の文化或ひは *Patagon del Fuego* の土人の過去及びその生活様式とは原始林の存在と共に遙かに南米への憧憬的となつてゐる。而して今この書に依つて我が海外同胞の埋もれたものに對する探索の姿が、その上にまた一つの新しい興味を興へて呉れたことを感謝したい。(本文三五頁、英文概要五頁、圖版五六葉、東京人類學會發行、定價壹圓五拾錢)(藤岡謙二郎)

史 學 研 究 會

例會 五月六日(土)午後一時三十分より文學部陳列館第一教室に於いて本學年度最初の例會を開き、左記の如き講演を行ひ、たほそれに關聯して教室の一部に大津京陞並に崇禎寺陞の出土品寫眞、實測圖等を展觀し一般の觀覽に供した。學外より多數の來會者あり盛況を呈した。

大津京址最近の發掘調査に就いて 柴田 實氏

(その概要は本誌前號並に前々號發掘欄所載の記事と重複するを以て省略する)

唐井五代に於ける佛教信仰を中心とする社邑に就いて 那波利貞氏

(本誌掲載に付、梗概を省略する)

國 史 學 會 大 會

國史科大學院學生を中心とする國史學會では恒例の春季大會を六月九日(土)午後一時三十分より樂友會館講堂に於いて開催、左の如き講演を行ひ五時過ぎ散會した。

多羅尾氏に就いて 平山敏治郎氏

一つの時代の過渡期に於いて、前代の社會的制度、身分に保障され、支持されてゐた人人が、その背後にある權力を失ひ、その